〔東京家政大学研究紀要　第30集 (1), p. 1 ～ 13, 1990〕

カント哲学の基本問題（一）

馬　場　喜　敬

（平成元年９月30日受理）

On the Fundamental Problem of Kant's Philosophy (I)

BABA, Yoshiyuki

(Received September 30, 1989)

1. カントは理解しつくされたか

カントは理解しつくされたか．

すでにAetas Kantiana[1] の時代以来，カントの著作は世に出るたびに傾倒と反論，称讃と批判(或いは非難）の渦をまき起した．「純粋理性批判」(1781年）が最大のきっかけであった．周知のように，1770年以来，10年余の沈黙が，人々の，すなわちケーニヒスベルクそして広くプロイセンの学者・要人たちのカントの活動に対する詮索・疑念・期待の心をこもごもつのらせていただけこの著作の浩瀚さ，難解さは，一応の充足とともに当惑をもたらした．

公刊にこぎつけるまでの10余年，カントがただ一人，書簡によってその進行状況や論述の困難さなどを洩らしてきた"wertester Freund"（カントはいつもこうよびかけた）マルクス・ヘルツ[2] の反応も鈍かった．かれはともかく忠実に学びとろうとするのであるが．

モーゼス・メンデルスゾーン[3] は一読しただけでは論旨がわかりかね，理解に時間がかかるのではなかろうかと危懼したこの本の読破を中途で断念する．そしてそれまでかなりの期間つづいた親密の情のこもった手紙の交換はと絶えがちとなる．

理解しえたかぎりにおいて，メンデルスゾーンはカントが「神の存在証明」に厖大な紙数を費しながら，結局その不可能性を結論付けていることに気づかざるを得なかった．その時のモーゼスの気持は，カントの召使「ランペ爺さんの悲しいおもい」と同じだった．「すべてのものを破壊するカント」Alleszerbrecher Kant, こういう言葉がいかにしても唇に上ってしまうのである．（モーゼス・メンデルスゾーンはそれから５年後，1786年に死んだ．）

ヨハン・ゴートフリート・ヘルダー[4] もまた「天界の一般自然史」（1755年）のときのように感激を以てカント，かつての師カントの〔コペルニクス的転換を内包する〕思想的成果を語る地点には立っていなかった．ヘルダーの場合には，歴史哲学的考察でカントとの"Lücke"（亀裂）があらわれはじめ，修復のために55年の地点にもどろうなどとはもはや不可能な心理状態であった．かれはのちに「純粋理性批判の超批判」"Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft" を書くであろう．…

ヨハン・ゲオルク・ハーマン[5] は理解した．カントを神秘主義者として．それ以外ではありえないではないかという態度で．「カントが自著のうちにある神秘主義に気付かないのはおかしなことだ」．「これは，すべての哲学者が熱狂的であり，逆も真なりで，自分ではそうとは知らない熱狂者だ，ということの一つの新しい証明だ」，とハーマンはいう．ヒューム[6] をカントに教えたのはハーマンであった．「ヒュームを知る以前のカント」を知っており，「ヒュームを学んだカント」を知るハーマンが，カントをこのようにみていたことは非常に興味ある事例である．

しばらく年が経って，カント哲学のよき理解者となり，この新しい潮流，いうなれば「啓蒙そして疾風怒濤」<Aufklärung, dann Sturm u. Drang>を内々に宿す批判哲学の普及の立役者となる者もでた．カール・レオンハルト・ラインホルト[7] の場合がそうであった．公刊当初なおざりにみていたこの大著の意義に目ざめるのに２年を要しなかった．

しかし普及が即座に，カント哲学がその深部に宿す本

教養部・哲学第一研究室

源的な力で人々をカントが目ざした哲学に覚醒させるものかどうかはまた別の問題であった．のちにフランツ・ブレンターノ[8]はいうであろう．清新な発端に次ぐ段階はつねに希薄化である，と．

混乱・誤解・曲解・早まった迎合をみて，カントは自ら摘要乃至手引き＜Auszug＞を書き上ろす決断をせざるをえない．それは大方の要望でもあった．何しろ「純粋理性批判」は難解の書であったのだ．1783年，「プロレゴメナ」がリガのハルトノッホ書店より出版された．

事態は改善されたか．わかり易くなった分だけ反響は大きかったといえよう．しかしそれは81年の状況を増幅して再現したようにもみえる．ひきつづく誤解，反論の高まり，そして …．

「物自体」Ding an sich の概念ひとつをとってみても，フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ[9]はいった．「物自体を理解しえなくてはカント哲学に入ることができず，物自体ある限りカント哲学にとどまることはできない」．

カント哲学にとどまることはできない．このような意志表示は，その徹底さからみれば，ヤコービにおいてはまだ序の口であった．フィヒテが，ついでシェリング，ヘーゲルが，もっと大胆に，カント哲学を自己流の哲学の出発点として活用するに至る．これらはのちにドイツ観念論哲学 der Deutsche Idealismusの名で総称されるようになるが，これは，さらにそののち，新カント派 der Neukantianismus の解釈を代表するものとして有名になったかのヴィンデルバント[10]の定言を，それに先立て早々と実践した一系譜といえるものであった．――" Kant verstehen, heißt über ihn hinausgehen."（「カントを理解することはカントを超えて歩き出すことである」）．

さて冒頭の問いにかえる．

カントを超えることを以てカント解釈の真価とする新カント派によってカントは理解しつくされたことになるのか．そうおもうのは新カント派のみであろう．しかも新カント派内部でもカント解釈は分裂している．周知のように，ヴィンデルバント，リッカートのハイデルベルク学派（別名ドイツ西南学派），コーヘン，ナートルプのマールブルク学派の二学派，及びその幾人かの担い手たちをみただけでも差異がいちぢるしい．

ここでもう一つ注意されるべきことは，上述のカント理解が「純粋理性批判」を主眼していることである．「純粋理性批判」にとどまらないとしても，そこからの展開である「実践理性批判」「判断力批判」を主眼としている．（カントサイドでいえば「純粋理性批判」構想時にすでに「判断力批判」までが意図されていたことは，数通の書簡が語っている[11]．）要するに「批判」の学としてのカント哲学である．カントの名は「批判」Kritikと強く結びつき，いわゆる「批判」期のカントを措いてカントを論ずるのは無意味な作業であろうことはいうまでもないが，ともかく，上述のカント理解においては，脚光を浴びているのは「批判期」カントであり，そのVorにもNachにもほとんどライトは向けられていない．Vor（前批判期，der elegante Magister，啓蒙著作家カント）は舞台の片隅にいる如くであり，またNach（Doktrin，System志向のカント）は"Vorのカント"とは多少扱われ方はちがうけれども，やはりそれほど前面に押し出されてこない．なお，「批判」のあとのDoktrinはカントにとって，「批判」前カントのDoktrinと当然ちがう筈である．そもそも「批判」の作業に，学の基礎構築を賭けたカントのDoktrinとはどんなものでありうるのだろうか．

批判期カントはVorとNachを加えたカント全体像のなかで見直されるべきであろう．カントの全体像すなわち多様なカント像を内包しつつ動的統一をなしているカント像をうかび上らせることが必要である．このことが実は冒頭の問いと深くつながる．

1. 註

1）Aetas Kantiana.「カントの時代」，1800年頃にひろく定着．したがってカントと同時代的zeitgenössischの意味に使うのはいささか不適当ではあるが，便宜的に使用。―― 1960年代，この語を冠したカント研究書シリーズがBelgium Brusselで刊行されはじめる．予定ではNo. 314まで，現在なお完了に至らず．著者数約116名（著者不明の文献も若干含まれる．）数例をあげれば――

Herden, Johann Gottfried (1744-1803) Nr. 91 Verstand u. Erfahrung. Vernuntf u. Sprache. — Eine Metakritik zur kritik der reinen Vernunft, 2 Bde. Leipzig 1799. 480 pp./402 pp.

Cramer, Johann Jacob (?) Nr. 57 Über Herders Metakri-

tik. Zürich u. Leibzig. 1800. (8)-118 pp.
Girtanner, Christoph (1760-1800) Nr. 82 Über das Kantische Prinzip für Naturgeschichte, Göttingen, 1796 XXIV-424 pp.
Hermann, Christian Gotthilf (1765-1823) Nr. 92 Kant u Hemsterhuis in Rücksicht über Definitionen der Schönheit. Erfurt 1791, 68 pp.

2）Marcus Herz (1747-1803). Berlin 生れのユダヤ人. 1766年から1770年までKönigsberg Univ.に学びカントの弟子となる. 1770年カントが「感性界と叡知界の形式と原理」を教授資格論文として提出した際公開討論会での応答論者にえらばれた. Berlin に戻って医者となるが, 1786年哲学教授職をうる.
Herzに宛てられたKantの書簡は「書簡集」(Immanuel Kant, Briefwechsel, Auswahl u. Anmerkungen von Otto Schöndörffer, PhB 52 a/b 1972）中に17通. 期間は1770年より1790年わたる. ——
1770, 9. 29 / 1772, 2. 21 / 1773 年末 / 1777, 8. 20
1778, 4 月はじめ / 1778, 8. 28 / 1778, 10. 20 / 1778, 12. 15 / 1779, 1.– / 1779, 2. 4 / 1781, 5. 11 / 1785, 11. 25
1785, 12. 2 / 1786, 4. 7 / 1787, 11. 24 / 1789, 5. 26
1790, 10. 15.
このうち1772年 2 月21日付けの 7 頁余に亘る書簡はとくにKrVの成立事情を示すものとの定評あり.

3）Moses Mendelssohn（1729 - 1786）
ユダヤ人哲学者. 1763年王立科学アカデミー懸賞論文で 1 位となる（カント 2 位). "Träume" をめぐってBriefwechselあり. "Morgenstunde" "Phaidon" などの著作あり, 神の存在, 霊魂不滅の論証に力をつくす.

4）Johann Gottfried Herder（1744 - 1803）
1762年～1764年Königsberg Univ.に学び, カントの講義をきき感激し, その印象を「回想録」に記している. また1755年の「天界自然史」に第一級の賛辞を捧げたことは既述の通り.
Herderに宛てたKantの1768年 5 月 9 日付手紙は, 若いHerderを激賞した文面である.

…私が貴方から頂いた小さな試み(KantがPopeの詩について行った講義をきいたHerderがその内容を詩文としたもの）から望みうるところでは, 知恵の優雅さであり, Popeだけがそこで輝きを放っているような詩的芸術において, 貴方が時が経つにつれて巨匠となられることを期待してよいでしょう…

のちにKantと対立的見解となる歴史哲学的主要著作とは, Auch eine Philosphie der Geschichte zur Bildung der Menschheit, （1774）, Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, 1784 などである.

5）Johann Georg Hamann (1730~1788)
1774, 4. 6. an Hamann
1774, 4. 7. von Hamann (ar Kant)
1774, 4. 8. an Hamann
この 3 日間のうちに交わされたBriefeはHerderの "Älteste Urkunde des Menschengeschlects, 1774"（「人類の最古の記録」）をめぐって意見が交わされている. この中で述べられたKantの見解はのちにモーゼ五書（すなわち「創世紀」ほか）を論じたKantの歴史書につながっていく.
HamannはMagus im Nordenで「北方の魔術師」といわれ, 疑いもなくKantと並んで当時Königsbergでもっとも重要な人物であった.
vgl. Hamann Briefwechsel, Bd 1 - Bd 7（1979）Insel Verlag

6）David Hume（1711～1776）がKantに与えた影響は哲学史上, 夙にいい古された一句に要約されるとみなされている. すなわち「Humeの懐疑論によって独断のまどろみを破られたKant は思弁的哲学の分野での新しい道すなわち批判の道を歩み出した」. しかしKant がHumeをどのような経路で摂取したかが一問題であり, これについては, Fukukama. T 「カントの人間学」（1988）及び同論文中のいくつかの註参照. またFukukama, T 「カントとヒューム」が詳しくそれに触れると予告されている.

7) Karl Leonhard Reinhold (1758-1823)
in Wien geboren, von Jesuiten erzogen, wurde 1774 Professor der Philosophie in Barnabiten-Kollegium, floh 1783 nach Deutschland, trat zum Protestantismus über und wurde Wielands Schwiegersohn. Er wurde bald ein begeisterter Verehrer Kants und trug durch seine populär gehaltenen ,,Briefe über die Kantische Philosophie'' (zuerst im deutschen Merkur 1786/87), ungemein viel zu deren Verbreitung bei. Dann aber strebte er über die Kritik hinaus und schloß sich zeitweise Fichte an. Er wurde 1787 Professor der Philosophie in Jena, 1794 in Kiel.

8）Franz Brentano（1838〜1917），"Vier Phasen der Philosophie," 1895. 哲学の発展史的見方を斥け哲学は各時代，理論—実践—懐疑—神秘の四相をくり返すとみる．

近代はDescartes（第1相）にはじまり，Locke（第2相），Hume（第3相）をへて，Hegel（第4相）に至る．KantはHumeをうけて，しかしHegel の手前，神秘主義の入口に立ちどまったところ，とみる．— HamannのKant 観との多少の類似に注目．

9）Friedrich Heinrich Jacobi（1743〜1819）

Kant は1789年8月30日．Jacobiに宛てて書き，Jacobiは同年11月16日「眩暈にも似た歓喜の麻痺を感じた」尊敬すべき師Kantという書き出しで返書をしたためた．しかし思想的には不一致．Kant が論証不可能とした三つの理念（神・自由・不死）を確知しうる機関として感情Gefuhlをあげる．批判主義の反定立としての信仰哲学Glaubensphilosophieの立場をとる．

10）Wilhelm Windelband（1848〜1915）．のこの一句は，Präludien,— Aufsätze u.Reden. zur Philosophie u. ihrer Geschichte（2Bde）Erster Band. 1924, Vorwortの末尾にある．その節を少し遡って記すと次の通り．

Wir alle, die wir im 19. Jahrhundert philosophieren, sind die Schüler Kants. Aber unsere heutige ,,Rückkehr'' zu ihm darf nicht die bloße Erneuerung der historisch bedingten Gestalt sein, in welcher er die Idee der kritische Philosophie darstellte. Je tiefer man den Antagonismus erfaßt, der zwischen den verschiederen Motiven seines Denkens besteht, um so mehr findet man darin die Mittel zur Bearbeitung der Problem, die er durch seine Problemlösungen geschaffen hat, *Kant verstehen, heißt über ihn hinausgehen.* (Straßburg, i.G. im Oktober 1883)

われわれ，すなわち19世紀に哲学しているところのわれわれはすべてカントの弟子である．しかしわれわれの今日のカントへの〝還帰〟はカントが批判哲学の理念を表現した歴史的に制約された形姿の単なる復活（更新）として許されているのではない．かれの思惟の種々なるモチーフの間にある対立関係を深く把握すればするほど，ますますわれわれは，そのなかにカントがかれの問題解決を通して創り出した諸問題に手を加える方法を見出すのである．カントを理解することはカントを超えて歩み出すことである．

ところで周知のように新カント派のおこりは Otto Liebmannにある．ドイツ観念論の破綻 — そのきっかけはヘーゲル自然哲学の実証自然科学による権威の失墜など — をうけて，再び「哲学」の原点カントを再認識しようとする．「Kant u. die Epigonen. 1865」によれば，ドイツ観念論者たちはカントの亜流にすぎない．その人名表には上記，Fichte, Schelling, Hegelのほかヘルバート，フリース，ショオペンハウエルも載る．"Also muβ auf Kant zurückgegangen werden"（「カントに戻らねばならぬ」）．この評語も，すでに周知のように，上記ヴィンデルバンドの一句とともに有名である．しかしいかなるカントに戻れ，なのか．それが「批判」の哲学者カントであることは自明されていた，といえよう．

Kant verstehen, heißt über ihn hinausgehen "Also muβ auf Kant zurückgegangen werden" とは同一の円（輪）の上の，もっともへだたった点にある見解といえよう．「カントを理解してカントをこえる」「カントに復帰する」．この一見相反するような見解も同一円周上に位置することにおいて相関関係をなしている．

カント解釈の歴史は＜Liebmann（1865）＞＜Windelband（1883）＞の時間的サイクルをこえて，この二つのことが随時・随所でくりかえされた集積，という様相を呈している．

11）「純粋理性批判」「実践理性批判」「判断力批判」の成立過程について論証しようとする者には，書簡を典拠とする方法が定着している．これが決定的に真相解明に通ずるかどうかはなお残る問題であろうが，…ともかく書簡には次のように書かれている．

ⓐ 1771. 6. 7 an Marcus Herz
ⓑ 1772. 2. 21 an Marcus Herz
ⓒ 1787. 6. 25 an Christian Gottfried Schütz
ⓓ 1787. 9. 11 an Ludwig Heinrich Jakob
ⓔ 1787. 12. 28/31 an Carl Leonhard Reinhold

ⓐ 1771. 6. 7 an Marcus Herz

. . . Sie wissen, welchen großen Eintluß die gewisse u deutliche Einsicht in den Unterschied dessen, was auf subjektivischen Prinzipien der menschlichen Seelenkräfte nicht allein der Sinnlichkeit, sondern auch des Verstandes

beruht, von dem, was gerade auf die Gegenstände geht, in der ganzen Weltweisheit, ja sogar an die wichtigsten Zwecke der Menschen überhaupt habe. Wenn man nicht von der Systemensucht hingerissen ist, so verifizieren sich auch einander die Untersuchungen, die man über eben dieselbe Grundregel in der weitläuftigsten Anwendung anstellt. Ich bin daher itzo damit beschäftigt, ein Werk, welches unter dem Titel: Die Grenzen der Sinnlichkeit und der Vernunft das Verhältnis der vor die Sinnenwelt bestimmten Grundbegriffe und Gesetze zusamt dem Entwurfe dessen, was die Natur der Geschmackslehre, Metaphysik und Moral ausmacht, enthalten soll, etwas ausführlich auszuarbeiten. Den Winter hindurch bin ich alle Materielien dazu durchgegangen, habe alles gesichtet, gewogen, aneinandergepaßt, bin aber mit dem Plane dazu nur erst kürzlich fertig geworden ...

…感性だけではなく，悟性という人間の精神力の主観的諸原理に基づくものを，直接に対象に関係するものから区別するということでの確実で判明な洞察が，哲学全体において，その上さらには人間の重要な目的一般に対していかに大きな影響をもつのか，あなたは知っておられる．体系的欲求に心を奪われることがなければ，たとえそれがどんなに広汎な適用範囲をもっているとしても，同一の根本的規則に関して加えられる諸研究はたがいに立証し合うでしょう．そこでいま私は「感性と理性との限界」という題目で，感性界のために規定された根本概念ならびに法則の関係と趣味論・形而上学および道徳の本性をなすものの輪廓とを併せ含むべき著作を，いささか詳細に仕上げることに没頭しています．この冬を通じてそれに必要なすべての材料を綿密に調べ，撰り分けて考え，互いにつき合わせてみましたが，この計画はつい先頃完成したばかりです．

ⓑ 1772. 2. 21 an Marcus Herz

. . . Die Prinzipien des Gefühls, des Gerschmacks und der Beurteilskraft mit ihren Wirkungen, dem Angenehmen, Schönen u. Guten hatte ich auch schon vorlängst zu meiner ziemlichen Befriedigung entworfen, und nun machte ich mir den Plan zu einem Werke, welches etwa den Titel haben könnte: Die Grenzen der Sinnlichkeit und der Vernunft. Ich dachte mir darin zwei Teile, einen theoretischen und praktischen. Die erste enthielt in zwei Abschnitten: 1. Die Phänomenologie überhaupt. 2. Die Metaphysik, und zwar mur nach ihrer Natur und Methode. Die zweite ebenfalls in zwei Abschnitten: 1. Allgemeine Prinzipien des Gefühls, des Geschmacks und der sinnlichen Begierde. 2. Die erste Gründe der Sittlichkeit. Indem ich den theoretischen Teil in seinem ganzen Umfange und mit den wechselseitigen Beziehungen aller Teile durchdachte, so bemerkte ich: daß mir noch etwas Wesentliches mangele, welches ich bei meinen langen metaphysischen Untersuchungen, sowie andere, aus der Acht gelassen hatte und welches in der Tat den Schlüssel zu dem ganzen Geheimnisse der bis dahin sich selbst noch verborgenen Metaphysik ausmacht . . .

感情・趣味および判定〔断〕力の諸原理をそれらの作用つまり快適・美・善とともに考える．そこで一つの著作を計画，表題は多分「感性と理性との限界」．その二つの部門（理論的部門と実践的部門）—

A．理論的部門 1.現象論一般　2.形而上学，その本質と方法に従っての．

B．実践的部門 1.感情・趣味および感性的欲求の一般的諸原理　2.道徳（人倫性）の第一原理

この理論的部門を，その全範囲にわたって，そしてまたそのあらゆる部門の相互関係において考えてみるに，私のやり方ではまだ何か本質的なものが欠けており，それは私が長い間の形而上学的研究において，他の人びとと同じように見過ごしていたものであり，しかもそれは事実上これまでそれ自体隠されたものである形而上学のすべての秘密を解く鍵となるものであることに気づいた．

ⓒ 1787. 6. 25 an Christian Gottfried Schütz

. . . Ich habe meine *Kritik der praktischen Vernunft* soweit fertig, daß ich sie denke künftige Woche nach Halle zum Druck zuschicken. Diese wird besser, als alle Kontroversen mit Feder u. Abel (deren der erste gar keine Erkenntmis a priori, der andere eine, die zwischen der empirischen u. einer a priori das Mittel halten soll, behauptet), die Ergänzung dessen, was ich der spekulativen Vernunft absprach, durch reine praktische, und die Möglichkeit derselben beweisen und faßlich machen, welches doch der eigentliche Stein des Anstoßes ist, der jene Männer notigt, lieber die untunlichsten, ja gar ungereimte Wege einzuschlagen, um das spekulative Vermögen bis aufs Übersinn-

liche ausdehnen zu können, ehe sie sich jener ihnen ganz trostlos scheinenden Sentenz der Kritik unterwürfen. Herder's Ideen, dritten Teil, zu rezensieren, wird man wohl ein anderer übernehmen, und sich, daß er ein anderer sei, erklären müssen; denn mir gebricht die Zeit dazu, weil ich alsbald zur *Grundlage der Kritik des Geschmacks* geben muß. Ich bin mit unwandelbaren Hochachtung u. Ergebenheit etc.

「実践理性批判」は来週には印刷に向けハレに送りうるほどまでに完成しました．この「批判」は，私が思弁的理性に対して拒絶したものの，純粋実践理性による補完と実践理性の可能性とを，フェーダーやアベルとのあらゆる論争（このうちフェーダーはアプリオリな認識を全く主張せず，アベルは経験的認識とアプリオリな認識との間を仲介すべきである認識を主張しています）よりも，もっとはるかにうまく証明し，理解せしめるでしょう．だが，このことはあの人たちが全く味気なくおもわせる「批判」のあの陳述に服するよりも，むしろ思弁的能力を超感性的なものにまで拡張させようと，最も実行不可能な，いやむしろ全く不合理な道を彼らに歩まざるをえなくさせる本来の躓きの石なのです．
ヘルダーの「考案」第三部の批評は別の人が引きうけて，その人は私とは別人なりということを言明しなければならない．私は間もなく趣味批判の基礎へと進まなければならないので，その批評の暇がないからです．

ⓓ 1787. 9. 11 an Ludwig Heinrich Jakob
— Jetzt ist meine Kritik der praktischen Vernunft bei Grunert. Sie enthält manches, welches die Mißverständnis der theoretischen heben kann. Unmittelbar wende ich mich nun auf die Bearbeitung der Kritik des Geschmacks, womit ich mein kritsches Geschäft schließen werde, um zum dogmatischen fortzuschreiten. Noch vor Ostern, denke ich, soll sie herauskommen.

今私の「実践理性批判」は印刷のためグルーネルト氏の許にあります．これは理論的理性批判に関する誤解を解くことができる多くのものを含んでいます．私はすでに「趣味批判」の仕上げにとりかかりますが，これで私の批判的仕事は終わり，それから教義的仕事に進むことになります．「趣味批判」は復活祭の前には出版されると思います．

ⓔ 1787. 12 28/(31) an Carl Leonhard Reinhold
. . . So beschäftige ich mich jetzt mit der Kritik des Geschmacks, bei welcher Gelegenheit eine neue Art von Prinzipien a priori entdeckt wird, als die bisherigen. Denn der *Vermögen des Gemüts* sind drei: Erkenntsnisvermögen, Gefühl der Lust und Unlust und Begehrungsvermögen. Für das erste habe ich in der Kritik der reinen (theoretischen), für das dritte in der Kritik der praktischen Vernunft Prinzipien a priori gefunden. Ich suchte sie auch für das zweite, und ob ich es zwar sonst für unmöglich hielt, dergleichen zu finden, so brachte das Systematische, was die Zergliederung der vorher betrachteten Vermögen mir im menschlichen Gemüte zu ergründen mir noch Stott genug für den Überrest meines Lebens an die Hand geben wird, mich doch auf diesen Weg, so daß ich jetzt *drei Teile der Philosophie* erkenne, deren jede ihre Prinzipien a priori hat, die man abzählen und den Umfang der auf solche Art möglichen Erkenntnis sicher bestimmen kann — theoretische Philosophie, Teleologie und praktische Philosophie, von denen freilich die mittlere als die ärmste an Bestimmungsgründen a priori befunden wird. Ich hoffe, gegen Ostern mit dieser unter dem Titel der Kritik des Geschmacks in Mskpt. obgleich nicht in Drucke fertig zu sein.

趣味の批判では，これまでの原理とは別種の新しいアプリオリな原理が発見される．
それは精神の能力は三つあるから，…
第一の能力については「純粋（理論的）理性批判」において
第三の能力に対しては「実践理性批判」において，アプリオリな原理発見．
第二の能力に対しても，その原理を探求，以前にはこのような原理の発見はできないとおもわれたが，以前に考察した諸能力分析の結果，人間の心の中に発見された体系的なものが — これを驚歎し，できればその根底を探ることは私の余生に対してなお充分の材料を与えるであろう — なおもこの道へと導いた．
その結果，それぞれがアプリオリな哲学の三部門が認められる．これらの原理は別々に分けて数えうる．且つこの仕方で可能な認識の範囲は確実に規定される．
三部門とは理論哲学，目的論，実践哲学，中間のものはアプリオリな規定根拠に最も乏しいが，趣味の批判〔がこれに答える〕．それは復活祭の頃には印刷では

なくとも草稿では了る.

以上によって，1770年の「可感界と可想界の形式と原理」ののち1年にして，KrVが(未だタイトルはそうなっていないが)，次に公刊する著作として計画されたことがわかる.

ⓐ(1771年)においてすでに今日のKrV をふみこえてKpVはおろかKUの主題までがとりこまれている. 但しその一部にとどまる. やがてKUをうめる二つの主題のうち，第一の主題のみであるが，「趣味論」はKUの二つの部門すなわち，美学的判断力と目的論的判断力のうち，前者の問題，後者がどのようにKUにとりこまれるに至ったかについては，書簡にあらわれてこない. この問題は別に論ずる.

ⓑはさらに具体的に KrV の成立過程を示す長文の書簡として知られている（前述).

ⓑ～ⓒの間，すなわち1772～1787の15年間における欠落は何を語るか. KpVへの模索はほとんどというか全くあらわれてこない. KpVはKrVに含まれていた，od. KpVの中心思想を背景にKrVも進行した，という事情が考えられる.

2. カントの人間への問いをめぐって

A

上述の帰結をうけてなされていることの一つは，カントの「人間への問い」に着目することである. ― その問いは次のように定式化されている.

1. Was kann ich wissen?
2. Was soll ich tun?
3. Was darf ich hoffen?
4. Was ist der Mensch?

1.私は何を知ることができるか. 2.私は何をなすべきであるか. 3.私は何を希望してよいのか. 4.人間とは何か. 「1～3までの問いは，結局第4の問いに帰着乃至包摂されるから，第4の問いが，哲学の根本問題をあらわしている」と，これはカント自らが言明していることである.

すぐに気付かれるように，この4つの問いの間にはある間隔，飛躍，位相の差がみとめられる. 1～3においては主語は ichであり，夫々 konnen, sollen, durfenという話法の助動詞を伴っている. 第4にいたっては主語は der Mensch と一般化されて，直説法現在の sein を以て語られるのである.

1～3は権利の問題として，4は事実の問題としていいあらわされている.

さて周知のように，この4つの問いは最初から4つであったのではない.

a) 最初に1～3の問いが「純粋理性批判」の先験的方法論(1781, 1787/A 805 B 833)にあらわれる. 私の理性のすべての関心(思弁的ならびに実践的関心)は次のような三つの問いにまとめあげられる. すなわち〔1.2.3.〕(前出)である. 第1の問いは全く思弁的問題である.(これはKrVで充分論じられた). 第2問は全く実践的である. その性質上，純粋理性に属しはするが先験的問題ではなく道徳的問題であり，したがって，KrVの論究対象ではない(のちにKpVが論ずであろう.) 第3問(これは「私がなすべきことをなしたら私は何を希望することが許されるか」と布衍される)は，実践的・理論的問題である. 希望はすべて幸福をめざす. そこで「幸福をうけるに値するように行為せよ」という命令(格率)が引き出され，「もし私が幸福に値するように振舞うならば，どうしたら私はそのような行状によって幸福にあずかりうるという希望をもつことが許されるか」というように具体化される.(これは宗教，神学の問題に至る).

b) 第4問が加わるのは著作(三「批判書」) ではなく，二つの講義「論理学」(Logik)と「形而上学」(Metaphysik)においてである.

1)「論理学」の公刊は1800年，G.B，イエシエ(Gottlop Benjamin Jasche(1762～1842)による.

Was aber Philosophie nach dem Weltbegriffe (in sensu cosmico) betrifft: so kann man sie auch *eine Wissenschaft von der höchsten Maxime des Gebrauchs unsrer Vernunft* nennen, so fern man unter Maxime das innere Prinziip der Wahl unter verschiedenen Zwecken versteht. Denn Philosophie in der letztern Bedeutung ist ja die Wissenschaft der Beziehung alles Erkenntnisses und Vernunft-

gebrauchs auf den Endzweck der menschlichen Vernunft, dem, als dem obersten, alle aundern Zweccke subordiniert sind und sich in ihm zur Einheit vereinigen müssen. Das Feld der Philosophie in diesen weltbürgerlichen Bedeutung läßt sich auf folgende Fragen bringen:

1) Was kann ich wissen?
2) Was soll ich tun?
3) Was darf ich hoffen?
4) Was ist der Mensch?

Die erste Frage beantwortet die *Metaphysik*, die zweite die *Moral*, die dritte die *Religion*, und die vierte die *Anthropologie*. Im Grunde könnte man aber alles dieses zur Anthropologie rechnen, weil sich die drei ersten Fragen auf die letzte beziehen.

Der Philosoph muß also bestimmen können

1) die Quelle des menschlichen Wissens
2) den Umfang des möglichen und nützlichen Gebrauchs alles Wissens, und endlich
3) Die Grenzen der Vernunft.—-

Das letztere ist das Nötigste, aber auch das Schwerste, um das sich aber *der Philodox* nicht bekümmert.

しかし，世界概念の上からの哲学に関しては，われわれが格率をいろいろな諸目的間の内的選択原理と解する限り，哲学はわれわれの理性使用の最高格率についての学問ともよばれうる．

というのは後者の意味での哲学は，人間理性の究極目的に関するすべての認識および理性使用の関係の学問であり，最高目的としてのこの目的にはすべての他の諸目的が従属し，そしてこの目的において統一へと結合されねばならないからである．

このような世界市民的意味における哲学の分野は，つぎの諸問題に帰着する．

(1)　私は何を知ることができるか．
(2)　私は何をなすべきか．
(3)　私は何を希望してよいのか．
(4)　人間とは何か．

第１の問いには形而上学が，第２の問いには道徳が，第３の問いには宗教が，そして第４の問いには人間学が答える．根本的にはわれわれは，これらすべてを人間学に数え入れることができよう．はじめの３つの問いは最後の問いに関係しているから．

それ故哲学者はつぎのことを規定できなくてはならない．

(1)　人間的知識の源泉
(2)　すべての知識の可能的で有効な使用の範囲．
(3)　理性の限界

最後のものはもっとも必要なもの，且つもっとも困難なものであるが，臆見を愛する者はそれに頓着しないでいる．

２）「形而上学」の講義でも同じ内容が語られる．この方の公刊は1821年，Ｋ．Ｌ．ペーリッ（Karl Heinrich Pölitz）による．

この第４問が加わった講義はいつ行われたか．論理学及び形而上学講義の開始の時期とは一致しないとみられるので，その具体的な日付けはいつか，ということが問われることになる．

それには，1793年５月４日，シュトイトリン宛の書簡が一つの目安を与える（あくまでも目安にとどまるが．）

1793. 5. 4 an Carl Friedrich Stäudlin

. . . Mein schon seit geraumer Zeit gemachter Plan der mir obliegenden Bearbeitung des Feldes der reinen Philosophie ging auf die Auflösung der drei Aufgaben: 1) Was kann ich wissen? (Metaphysik) 2) Was soll ich tun? (Moral) 3) Was darf ich hoffen? (Religion); welcher zuletzt die vierte folgen sollte: Was ist der Mensch? (Anthropologie; über die ich schon seit mehr als 20 Jahren jährlich ein Kollegium gelesen habe). — Mit beikommender Schrift: *Religion innerhalb den* Grenzen etc. habe die dritte Abteilung meines Plans zu vollführen gesucht, in welcher Arbeit mich Gewissenhaftigkeit und wahre Hochachtung für die christliche Religion, dabei aber auch der Grundsatz einer geziemenden Freimütigkeit geleitet hat, nichts zu verheimlichen, sondern, wie ich die mögliche Vereinigung der letzteren mit der reinsten praktischen Vernunft einzusehen glaube, offen darzulegen.—-

（純粋哲学の領域においてすでに久しい以前から私に課せられていた研究の計画は，三つの課題を解決することでした．すなわち第一に，私は何を知りうるか，（形而上学），第二に，私は何をなすべきか（道徳），第三に，私は何を希望してよいのか（宗教）がそれです．そして最後に第四の課題，すなわち人間とは何か（人間学．これについて私はすでに20年以上も年々講義を続けてきました）がこれに続かねばならないでし

ょう．— 私は，この手紙とともに送る「限界内の宗教云々」という著述を以て私の計画の第三部を完成しようとしました．この著作の仕事で私を導いたものは，良心をもつということとキリスト教に対する真の尊敬とでしたが，しかしまたこの場合，何事も秘密にすることなく，私がいかにしてキリスト教と最も純粋な実践理性との可能的一致を洞察すると思うに至ったかを率直に述べようとする公明正大の原則が私を導いてきました．

B

以上の資料から明らかなごとく，「人間への問い」は前段階としてKrVで輪廓付けられた1～3の問をうけて，「三批判書」ではなく「三批判書」外の講義及び書簡の中で公言された．「人間への問い」に目を向け，それによってカントを充全に理解するということは，すなわち「三批判書」にとどまらず，カントの言明に即して「人間学」を正しく顧慮すべきであるということになる．

ところでカントが20年以上も講義した「人間学」とは「実用的見地からの人間学」というものであった．果してこの「人間学」講義を以てカントは第4の問いに対する「人間学」をおおいつくすものと考えたのであるかどうか．また，さかのぼっていえば，1～3の問いが第4の問いにいかにして関係付けられるのか，どうしてこれらすべてを人間学の中に算入しうるのかという問題が残る．— 前述した如く1～3は話法の助動詞をもっていいあらわされている如く権利の問題であり，4は事実の問題であることを示している．—

現代を代表する二つのカント書がこの問題にふれている．前項については主としてヤスパース Karl Jaspers（1883～1969）が，後項については主としてハイデッガー Martin Heidegger（1889～1976）が論じている．

a）ヤスパースはその著「カント」〝第5章，カントの理性〟の＜a）思惟方式の革命＞において，コペルニクス的転回といいならわされているカントの「思惟方式の革命」の意義をカント哲学の中枢にあるものとして語ってのち，＜b）カント的問題領域の拡がり＞において，〝4つの問い〟についてのべる[1]．

カントの全哲学を包括する3乃至4の問題として各所に繰り返される有名な根本問題は次の様式で展開される．として，1），2），3）をかれの包括者哲学から逆照射的に語り，4）にいたる．

これらの問いにカントは二ケ所で第4の問いを付け加えている．すなわち＜人間とは何か＞という問いである．かれは1～3は最後の問いにかかわりうるであろうといっている．カントによると，包括的で他を含む第4の問いは，カントが，神，存在，世界からでもなく，客観からでもなく，主観からでもなく，もっぱらそこにおいてこれら一切がわれわれにとって現前的となる場所としての人間からの出発することを意味している．真実なる一切は，自己の現存在において，経験ないし行為を通じて確証さるべきなのである．しかし第4の問いの優位は決して，存在認識を人間認識をもって置き代えるべきであるという意味ではない．問題なのはあくまで存在であるが，しかし存在とは，人間の手でただ人間存在を通じてのみ，触れ，把握し，感知しうるようになるのである．この問いは，カントが人間とは何かに最後的な答えを与えたことを意味しない．人間は他のものに包摂できないし，その本質において，われわれに知られた，なお別の種を含む類のうちの一種なのではない．人間とは，われわれに可能なものが現実的となる場所である．カントは，プラトンの語らせるソクラテスのように語りうるであろう．すなわち人間は台風以上に驚異的な存在であろうが，私は人間が何であるか知らない．われわれは人間であり，人間を意識し，そしてわれわれを問う，われわれは決して見通されぬ，人間存在という道において，もろもろの答えを見出すのである，と．

ヤスパースは「人間とは何かという問いは，始めからカントの＜哲学すること＞の衝動なのである」という．カントは前批判期にすでに，「もし人間が真に必要とする学問があるとすれば，それは私が，被造物の中で人間に指定された地位を適切に満たすことを説いている学問であり，人間であるために人間があらねばならぬものをそこから学びうる学問である」と書いているのである．しかしこの問いは1～3の問いのようには特定の著作を以て答えを与えられなかった．しかしまた公刊されたカントの「人間学」も，カントの本意に相応するような第4の問いの答えではない，とする．「それは人間学を，実用的見地において取扱うもので，高度の興味をそなえ

てはいるが，カントの問いの偉大さを熟考する者には幻滅である．第４の根本問題には，ただカントの著作の全体がその答えなのである」．

カントの全著作が第４の問いの答えをなしている，というヤスパースの真意はヤスパースの本書（「カント」）全体が示そうとしていることである．

b）ハイデッガーの場合，かれの「カントと形而上学の問題」は，形而上学の問題を基礎的存在論としてくりこみ，カントの純粋理性批判を形而上学の一つの定礎として解釈するという課題にとりくむ．その＜第４章・反復における形而上学の定礎＞，その＜A）人間学における形而上学の定礎＞をみることになる．ここでハイデッガーは，「第４の問い」を問うている[2]．

人間への問いのこの問題性こそ，カントの形而上学定礎という出来事において明るみに押し出された問題性なのである．いまはじめて次のことが示される．すなわちカントが彼自ら露呈した基礎，すなわち先験的構想力から後退したこと（純粋理性の救済，すなわち独自の地盤の確保を意図して）は，この地盤の破壊，したがってまた形而上学の深淵を開示するごとき哲学することの動きである．ということがそれである．

つまりハイデッガーの主張はこうである．「カントは形而上学と人間学の統合を開陳した．するとかの１～３は，特殊形而上学 Metaphysica specialis である宇宙論 Kosmologie，心理学 Psychologie，神学 Theologie に関係する．それらを統括する 4.は人間学 Anthropologie というが，もちろんこれはいまいった特殊形而上学の分科としての合理的心理学の延長・拡大ではなく，むしろもう一度，１～３を定礎し直す人間学＝哲学的人間学（od，超越論的人間学 anthropologia transcendentalis ── ハイデッガーはカントの遺稿（Opus postumum）中のこの概念に注目する ── でなければならないが，カントの人間学はそこまで至らずにおわっている．そして畢況，

「哲学的人間学」は人間に関するいかに多様かつ本質的な認識をもたらそうとも，それが人間学であるという理由だけでは決して哲学の基礎学科たる権利を主張しうるものではない．かえってそれは，形而上学の定礎を意図する人間への問いをはじめて問いとして完成する必要性が依然として蔽いかくされたままであるという危険をつねに含むのである．

爾余のことに関してはそれを論ずる道をハイデッガーがひとり歩くに任しめよ！

C

冒頭に，孔子「論語」為政第二の有名な一節がある．「吾十有五而志于学，…」．人間の精神的発展，別言すれば人生行路の精髄を叙して，簡にして実にとむ．

Fukukama, T「カントの人間学」（1988）は，これを枕に，カントの「人間学」を論じつつ，カントによる人間精神の三段階説をとり出す．またカント哲学成立の知識社会学的分析も欠くことなく，その上で「三批判書」を照射する「人間学」を見きわめている．

全体の構成は次の通り[3]，──

「序言」．〔I〕「人間学」の概要── ⓐ「人間学」の体系的位置付け．ⓑ「人間学」の内容．〔II〕「人間学」の問題点．── ⓐ「認識能力」について，ⓑ「叡智」への三段階．ⓒ「性格」について．「結語」．

前述の如くカントの「人間学」は「実用主義的人間学」であるが，その哲学体系的位置付けをはっきりさせるべきである．本論文によればカントの全著作を参照すれば次の如くなる．

1）ギリシャ哲学の伝統に則して分類（Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Vorede）

哲学
1. 自然学〔形而下学〕（Physik）
2. 倫理学（Ethik）
3. 論理学（Logik）

この三科学（Wissenschaften）を(A)理性認識（Vernunfterkenntnisse）の見地より「対象」に則して分類 ──

(A)　理性認識（Vernunfterk.）

1.「形相的理性認識」（Formale Vernunfterk.）…対象「純粋思惟」（reine Denken）→「論理学」（Logik）

2.「質料的理性認識」（materiale Vernunfterk.）…対象(i)「自然」（Natur）→「自然学」（Physik; Naturlehre）

(ii)「自由」(Freiheit)→「倫理学」(Ethik; Sittenleher)

(B)　「哲学」

1.「経験哲学」(Erfahrung に基づく)

2.「純粋哲学」(Prinzipien a priori から)

(i)「形相ー純粋哲学」→「論理学」

(ii)「悟性対象被制限哲学」ー「形而上学」$(B)_2$

$(B)_2$　「形而上学」

1.「自然形而上学」(die Metaphysik der Natur)

(i) 経験的部門 (der empirische Teil)

(ii) 理論的部門 (der rationale Teil)

2.「道徳形而上学」(die Metaphysik der Sitten)

(i)「経験的部門」ー「実践的人間学」(praktische Anthropologie) $(B)_3$

(ii)「理論的部門」ー「道徳学」(Moral)

$(B)_3$　「実践的人間学」(praktische Anthropologie)

(i)「自然〔生理〕学的人間学」(physiologische Anthr)

(ii)「実用主義的人間学」(pragmatische Anthr.)

以上の如く「実用主義的人間学」の哲学体系的位置付けを克明に行う一方，「頭初から〝人間学〟の基本原理であった〝三段階説〟」が再三主導モチーフをなすように解説が進められる．総合すると，

1.技能 (Geschicklichkeit)ー自主思考成立ー正しい悟性 (ein richtiger Verstand) 30才

2.賢明 (Klugheit) ー他人の立場での思考成立ー訓練された判断力 (eine geübte Urteilskraft) 40才

3.叡智 (Weisheit) ー自己自身と常に同調的思考成立ー根本的な理性 (eine gründliche Vernunft) 60才

このように，人間の実践理性＝意志が発展しうるためには，心の内奥での一大革命（「啓蒙」と称される未成年状態から自己責任ある主体への脱皮）が経験されなければならず，また，純粋理性概念すなわち理念の実践である道徳性を一挙に獲得するが故に一爆発 eine Explosion にたとえられる自己革命が絶対条件である．

この論稿は次の一節をもって終結に向う．——

カントの「実用主義的人間学」と名付けられた実践理性優位の批判哲学は，ついには「遊星人」の存在まで想定しつつ，「地球市民」としての「人類」の「自己啓蒙」の可能性と併せて，その「必然性」を力説しつつ終結する．カントの論述を要約すれば，「人間」は，理性認識能力 ($(A)_2$) を，1「(正しい) 悟性」2「(訓練された) 判断力」3「(根本的な) 理性」として行使することにより，順次に，1「技能」(自主的思考成立 —— 20才)，2.「賢明」(他人についての洞察成立 ——40才) そして最後に　幸いにして30〜40才間ぐらいに「重大な」内面的「革命」を突如体験できれば，つまり一種の「自主的」「天啓」を受けることができ，「心構え」ないし「覚悟」が決まれば —— 3.「叡智」(常に自己調和的な思考 —— 60才) に到達できる，とされている．

この主張は宗教そのものである．そこには自己自身による「啓蒙」という矛盾的ながら一種の「啓示」さえ存している．「宗教」(Religion, religio) とは語源的には「縛ること，縛るもの」を意味する．「義務」の自主的遂行は，カント倫理学の根本理念である．至高目標のための自律的に自己を束縛することこそ，「叡智」の実践であり，真の自由と救済への路である．かくしてカントは「わが上なる星空」の「遊星人」にまで遥かに思いを馳せながら，

永遠に理性的なるもの
われらを引上ぐ

と，歌いつつ「わが裡なる道徳律」すなわち「純粋理性」概念の宗教を完結する。

「カントの人間学」の筆者は，かくの如く，カントの人間学（「実用的見地における人間学」）を明確に「三批判書」に向き合わせている．また全著作への充分な目くばせを以って（Vor においてはとくに「天界の一般自然史」「視霊者の夢」「美と崇高」など，Nach としては「単なる理性の限界内の宗教」「諸学部の争い」など）「人間学」を通して，カントの思想的伝記をいろどるいくつかのドラマに言い及んでいる．さらに以下をみよ．

「人間学」はカント自身の身の上に，30〜40才にして初めて「自主的」な「内面的革命」「自己啓蒙」が，「爆発」的に生じたことを示唆，いな，明示さえしている．カントによれば，「男性」も「女性」も，「民族」も「人種」も，「人類」までもが，「人間」である限り，たとえ時期は遅れても，この「革命」を体験しなければならない．そして，その「革命」による，

「性格」確立ののちにさらにまた，「永遠に」完全な実現の可能性のない「窮極目標」を目指して，「神」の「恩寵」にも，「祈り」にも，「儀礼」にも頼ることなく，「自主的」に立向わざるをえないという人間理性のこの「先天的」特性，「目的の王国」追求のこの「天路歴程」――これは人間にとって「悲劇」か「喜劇」か―― それとも「神なき」ダンテの「人曲」(La Umana Commedia)か，――それは，誰も知らない．しかし，ここより，ドイツ観念論，すなわちドイツ「理想主義」哲学という壮大な「ロマーン」(Roman)が誕生したことは事実である．

さきに「永遠に理性的なるもの／われらを引上ぐ」といわれた．いうまでもなく，また筆者も註記している如く，これはGoethe；Faust, Zweiter Teil 終末の句，Chorus mysticus 最後の2行のいいかえである．

「永遠に女性的なるもの／われらを引上ぐ」．これを含むChorus mysticus 8行はGoethetumの要約である．GoethetumとはChristentum，Luthertumとの内的連関においてのみ解釈・理解されうるキリスト教の一形態である．（拙稿「ゲーテ，ファウスト終末の句について」参照）．

「永遠に女性的なるもの」を「理性的なるもの」とすることは，キリスト教解釈次元での事柄であり，das Europalogische 全体への洞察が生んだいいかえである．またカントに「人間性の天路歴程」の姿をみつめる視点も，ヤスパース，ハイデッガーと異なり，両者においては生れえぬEuropalogieの生成を告げている．

以上，2.(A)(B)(C)が「カント哲学の基本問題」を論じようとする本論稿の前提をなす．

2. 註

1）Karl Jaspers：Die Großen Philosophen, I (1957)―“Die Fortzeugenden Gründer des Philosophierens”の項の＜Kant＞(S. 397～616). そのS. 519 ff, この部分，のちに1巻本としても刊行．Jaspers はとくに引用箇所を明示していないのが不便であるが，「人間学」からの引用も少くない．

2）Martin Heidegger：Kant und das Problem der Metaphysik, 1929, 1951[2], S. 187 ff.（また，とくに S. 195.）

カントが，(1)形而上学，(2)道徳，(3)宗教，としたのと異なり，(1)宇宙論，(2)心理学，(3)神学とする．また1～3の問いにあらわれるKönnen, Sollen, Dürfen について

Das innerste Interesse der menschlichen Vernunft vereinigt sich in die genannten drei Fragen. Darin steht ein Können, Sollen und Dürfen der menschlichen Vernunft in Frage. Wo *ein Können* fraglich ist und sich in seinen Möglichkeiten umgrenzen will, steht es selbst schon in einem Nicht-Können. Ein allmächtiges Wesen braucht nicht zu fragen: was kann ich? d.h. was kann ich nicht? Es braucht nicht nur nicht so zu fragen, es kann seinem Wesen nach diese Frage überhaupt nicht stellen. Dieses Nichtkönnen aber ist kein Mangel, sondern die Unberührtheit von jeglichem Mangel und „Nicht.” Wer aber so fragt: was kann ich?, bekundet damit eine Endlichkeit. Was vollends in seinem innersten Interesse von dieser Frage bewegt wird, offenbart eine Endlichkeit im Innersten seines Wesens.

（要旨．人間理性の最奥の関心はいまいった三つの問いの中に合一されている．そこでは，人間理性の可能・当為・許容が問われている．ところで可能Könnenが問題となり，自らをその可能性において限定しようとするとき，それはすでにそれ自身，不・可能の中にあるのである．……全能者にはこの問いは不要．……
私は何を為しうるかの問いは人間の有限性を示すものであり，このような問いによって最奥の関心をゆりうごかされるものは，その本質の最奥における有限性を開示する．）

Sollen, Dürfen の検討も同様に人間の有限性をあらわにする．いまや「有限性は，純粋人間理性にたんに結びつくだけではなく，理性の有限性の有限化，すなわち有限でーありーうることについてのSorge(配慮)であることが明らかとなる」．且つ「これら三つの問いはこの一つのもの，すなわち有限性をたずねるが故に，人間とは何かという第4の問いに関係づけられる」．且つ「第4の問いはたんに1～3の問いに付加されるのみでなく，1～3の問いから自己を解き放つ第1の問いに変化する」．

Können, Sollen, Dürfenは，Heidegger において，

このように，様相の異にする権利問題としてでなく，もっぱら人間の有限性に関わる問題となる．

3）福鎌忠恕：「カントの人間学」（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所「研究年報」1987年第22号（1988・3月）1～24頁 —— 著者のカント論としては近刊予告の「カントとヒューム」ほか，「ヒュームと形而上学」(一)～(四)においても随所にカントへの論及がある．「モンテスキュー，生涯と思想（三巻）」，「ヴォルテール，生涯と思想」ほか，ロック，ベーコン，ホッブス，A．スミス，ヴィーコなどに関する多くの論著は＜新しいEuropalogie＞の生成を示す．—— なお〝カント〟でこれに比肩しうるものとして，近時ではグリガ「カント」をあげておきたい．A．V．Gulyga：Kant, 1977（Moskaw），1981（Frankfurt am Main）クリガ（1921～）はソ連科学アカデミー哲学研究所員，作家同盟会員．Kantのほか，Lessing，Herder，Hegelについて著作がある．モスクワで発行され4年後1981年，すなわちKrV 200年祭を記念して独訳が刊行され他のカント書以上に読まれたことは注目される．（因みに1881年KrV 100周年時にはHans Vaihinger（1852～1933）のKommentar zur KrVが代表的である．すなわち中心点が認識論から全体像に移る．「哲学者の生活はかれが書いた著書の内にあり，かれの生活中の最も感動的出来事は思想の中にある．単調なカントの外的生活に対し，その思想は緊張して劇的に生きた」さまを活写．自国のトルストイとドストイエフスキーとカントとの関係をも親愛をこめて語る．いわゆる「日本におけるカント受容史」の見直しに他山の石．ここでも新しいEuropalogieへの方向が重要課題として浮上する．